

方剂名		効能	生薬組成
書籍		主治および証	病機 方意
温裏剤 回陽救逆剤 1			
しぎやくとう 四逆湯	回陽救逆		生附子 6～9g・乾姜 6～9g・炙甘草 6g 附子を約1時間水煎した後他薬を加えて煎じ、分2で服用する。服用して嘔吐するときは冷服させるとよい。
傷寒論	<主治> 陽虚、陰寒内盛（少陰病） 四肢の冷え、寒がる、縮こまって寝る、元気がなくとうとする、嘔吐、腹痛、不消化下痢、口渴がない、舌質が淡、舌苔が白滑、脈は沈細で無力などを呈す。 亡陽虚脱 ショック状態で、上記の症状以外に、冷や汗が止まらない、脈が微弱で絶えそうになるなどを呈す。	<病機> 寒邪が少陰腎に侵入して陽気を衰微させ、腎陽だけでなく心・脾の陽衰を伴った状態である。 腎陽が虚衰して全身を温煦することができないため、四肢のつよい冷え（厥逆）、寒がる、身体を縮めて寝る、元気がないなどを呈する。心陽が虚して心神不振になるのでとうと眠たがり、血液の鼓出も低下するので脈は沈遅で微細になる。腎陽虚で脾胃を温煦できず陽気が衰弱すると、昇降が失調して嘔吐、腹痛、下痢がみられ、水穀の運化ができないために不消化下痢が生じる。 また、発汗法や瀉下法を誤用して陰津を損傷すると、これに付随して陽気も脱失して「亡陽のショック」に陥り、陽虚の症候以外に冷や汗が止まらず脈が微弱で絶えそうなどの症状が現われる。	<方意> 心、腎、脾の陽気が衰微した陰寒独盛の重症であるから、速やかに陰寒を除き回陽救逆する必要があり、純陽の大辛大熱の薬物でなければ目的を達することはできない。 大辛大熱の附子は腎陽を温補する第一の要薬であり、十二経を通行して温陽逐寒し、生用するとより速やかに内外を通達する。同じく大辛大熱の乾姜は、中焦脾胃を温補して裏寒を除き運化を回復させ、附子を助けて陽気を振発させる。甘温の炙甘草は温中益気に働き、附子の毒性を弱めるほか、附子・乾姜の辛烈の性質を緩和する。全体で陰寒を除き陽気を回復し、厥逆を改善する効果が得られる。
			参考 陽虚の陰寒内盛で、格陽による体表部の熱感が生じた場合は、真寒假熱で陽気を脱しようとしているから、四逆湯で回陽救逆する。
つうみやくしぎやくとう 通脈四逆湯			四逆湯の附子を9gに・乾姜を9～12gに増量したもの。
傷寒論	陰寒内盛による格陽（裏寒外熱）に用い、乾姜・附子で強力に補陽散寒して、外に格された陽気を裏に引き戻す。その他に、四肢の冷えがつよく、脈が微細で触れがたい症状もある。	加減法 陰寒内盛で、陽気が上に格された「戴陽」の顔面紅潮には、破陰逐寒の葱白を加えて陽気を引き戻す。この場合、更に下記の証に対しては、以下の如く対処する。 肝脾不和の腹痛には、葱白を除き、平肝止瘕の芍薬を加える。 胃気上逆の嘔には、生姜を加え和胃止嘔する。 咽痛には、酸斂の芍薬を去り、利咽の桔梗を加える。 下痢が止まっても脈が回復しないときは、桔梗を去り、大補元氣の人参を加える。	
つうみやくしぎやくかちよたんじゅうとう 通脈四逆加猪胆汁湯			通脈四逆湯 + 猪胆汁 10ml 猪胆汁の代わりに羊胆汁でもよい。
	嘔吐、下痢が止んでも、汗が出て、四肢が冷え、四肢がひきつり、脈が微弱なのは、陽気、陰津共に涸竭しかけている危候であり、 通脈四逆湯で逐寒回陽させると共に、反佐として苦寒の猪胆汁を加え、辛熱薬が陰寒によって格拒されないように配慮している。		
しぎやくかにんじんとう 四逆加人参湯			四逆湯 + 人参 3g
傷寒論	下痢が止んでも悪寒、脈微が回復しないのは、陽気が回復したのではなく、陰津が欠乏したために下痢しなくなったのであるから、四逆湯で回陽救逆すると同時に人参で益気生津する。		